

---

# 中二病女と腑抜けな男

帝国皇帝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中二病女と腑抜けな男

### 【Nコード】

N9922X

### 【作者名】

帝国皇帝

### 【あらすじ】

荒スジである。特に意味はありません…ごめんなさい（笑）

## 中二な彼女（前書き）

変な本のある本屋、『岸本書店』でいつも店番をする主人公は、中二病少女と出会い…。

## 中二な彼女

「あー、疲れたあ」

こつ愚痴を言っても変わらないのは知っている。俺は、岸川書店の息子たる岸川港<sup>きしかわみなと</sup>16歳。1ヶ月前に入学して高校は行ってるけどはつきり行つて特に何も無い。

「港。早く本どけ！店開けるから。」

こつ言つのは親父、岸川書店の店主岸川健夫だ。うちはこの通り本屋をやってるが…あまり繁盛してない。置いてあるのは出てくる時代でも間違えたかのような内容不明な革の分厚い本や、研究書、小説だの漫画だの雑誌だのは隅つこのほうに棚一つ申し訳程度しかない。

「ねえ、もう小説バンバン売らない？まったく意味不明な本あつてもしょうもないじゃん。」

「馬鹿もんが。本に失礼だろが！」

「つて言つたつてね…。」

親父は頑固だ。だからこそここにある古い本が十何年も生き永らえているのである。けどもこの商売にならない本をいつまでも置いている理由はあるらしい…。けど何も言わない。と言うか覚えてないんだと思う。

「商売上がったりじゃ店閉めるしかないよ。」

「…うるさいわ。」

今度は頭を殴られた…。まあ仕方ない。

俺はいつもの問答を終えた後、いつもどおりの坂道を駆け下り学校へ向かった。はつきり言つて友達は無いに等しい…。たまにノート見せてくれないかと尋ねられること以外席の隣人とも話したことは無い。頑張つてこの高校に入つたはいいが、特に何も面白いこともなく、店のレジ打ちのため部活にも入ってない。俺の家は大通りの坂道沿いにあるレンガ造りの本屋である。ちなみに言うと、本

屋の一部は親父の趣味でカフェになっている。高校はこれまた坂を下りてすぐの角を曲がった先にあるせいかかなり近い。ものの2・3分で着くと、二階の昇降口から3階へと上がる。クラスは1・4・三階のせいか、桜の匂いが鼻をつく。いつものように窓際中ごろの自分の席に座り、チャイムを待つ。クラスは喧騒に包まれている。聞いても特もない話だ、聞く必要がない。中学時代、俺はほかの友達の家より少し遠かったため、高校は皆と離れてしまった。なんてことを思い出す。リア充だったあの頃は。チャイムが鳴り、みんな席に着く。まもなく教室のドアが開かれ担任が入ってきた。名前は、三宅高次みやけたつぐだったか。あまり人の名前を覚えるのは得意ではない。

「起立、気をつけ……礼」

あれは確か学級委員の小池だ。下の名前：そんなのは知らない。

「おはよう、今日の授業に特に変更はない、みんなしっかりと授業を受けるように。」

それだけだ。この担任には教師特有のらしさが無い。時々この人は本当に教師なのかと疑いたくもなる。まあ、話の短いことに悪いことは無い。はて1時間目は何だったか……。あ、数学か。特に問題なし。と思って席に座り直そうとしたとき……

「ええー抜き打ちテスト!？」

一人の声で、  
クラスの空気が春にもかかわらず凍りつく……。

「ええええええええええ」

そう、凍りつき、音を立て砕けた。抜き打ちか。流石抜き打ちだ。苦笑いをするしかない俺だった。

案の定テストは散々で、自分がこんなにも頭が悪いのかと呪いになった。まあ、どの道本屋を継ぐ俺にはあまり関係のない話だが……転職するときに……と、珍しく親父がまともな事を言ったから行っているだけ。クラスの皆も散々だったらしく、どんよりしていた。一日の授業も終わり、鞆を持って教室を出る。階段を降り、昇降口

を出て正門を出る。朝と同じ道を行き、店にもどる。相変わらずガラガラ…。鞆を二階に置いてレジに入って入荷した本を少し読む。汚さず、跡を付けず、慎重に…。どれからどれだけ時間が過ぎたのか、文庫本の半分を読んでいると滅多に拝めない客の姿があった。まずうちの店は万引きはない。万引きしても意味ないものが手前にあるからだ。その客は奥の本棚まで行ってうるちよろしていた。そう、明らかに挙動不審。

「まさか、なあ…。」

まあ、一応声を掛けてみよう…。だが何故だろう。全身が「こいつと関わるな!」と警報を鳴らしている。黒い長髪の後姿、ん?よく見ればこいつ…。うちの学校の生…徒じゃないか?

「君…な、何してるの?」

「っ!あ、あなたはっ!っく…追手か…。」

「は?」

全くもって意味不明である。追手?さっぱりだ…。

「な、なんでもない!」

頬を赤らめる少女、ああ、こいつ中二病入ってるな。そして盛大に鞆で本棚の本をふっ飛ばしつつ走って店外へ…。しかしすぐ店内に戻ってきた。若干濡れて…。ん?と思って空を見遣ると土砂降っていた。あーこいつ帰れないのか。なんてことを考えて、仕方がないからタオルを持って声を掛けに行く。

「はい。災難だったな。」

「うぐ…。あなた誰なの?その制服…同じ学校っぽいけど…。」

落ち着いたのか普通に喋る少女。黒い長髪に整った顔立ちの少女は、三笠木葉みかさのきはと言う。彼女は16だから全く関わりがなく、双方知らなかったのだ。ココじゃ狭いなと思って、ある程度広いカフェの方へ案内する。

「へえ…あなたのうちはカフェまでやってるの?じゃ、おいしいコーヒーでも貰おうかしら…。あ、もちろんブラックね。」

「はいはい、140円ね。」

「あら、高いのね。」

「一応豆は好い物だ。それでも高い言うなら…。」

「言うなら？」

挑戦的な視線を向けてくる。

「はあ…。いいよ、一杯だけおごるよ…。傘すら置いてないからな…ここ。」

「あら優しいのね。それとも女に甘いだけ？」

なんだこいつ…。さっきから態度がガンガン変わってるぞ！？

「雨上がったら帰れよ。」

聞いてないという風にコーヒーを啜る。そう、とても幸せそうに。  
はあ、あと二時間は上がらないだろうな…。雨。

## 結局…。その一

結局…、雨は止まずにかれこれ二時間も土砂降っている。まだ降らし足らないのか、いつこうに収まる気配が無い。

「やまねーな…雨。」

「…」

コーヒー二杯も奢らせた拳句、商品を立ち読みをして時間を潰すという暴挙に出た三笠木葉は、最初に小説内の登場人物にキレ始め、本棚に激震が襲うようになったためハリセンでひっぱたいて“静かにさせた”ところだ。まあ、こうして静かにしてくれるのは大変よろしいことだと思っていたら、今度は急にぶっ倒れたではないか。

「おい、何寝てんだよ。」

「お…なか…が…へった…の」

「うげっ…。」

こ…こえ…。夢見心地でそんな声出されるともったこえ…!!!  
!…!うちの冷蔵庫には酒のつまみ（モチのロンで親父の。）と…。あと何も無かった…。餓死りそうなコイツを放置すんのもなんだしということとで近くのスーパーのタイムセールまで残り五分なのを確認し、傘も邪魔なので差さずに猛ダッシュでスーパーへ出かけた。しばらく運動してないからか、脚が重いような気がする。一応タイムセール二分前に到着し、かごを持って近くの商品棚を適当に漁る。説明すると、このスーパーはタイムセール中にレジを通ると五十パーセント引きというシステムだから先に準備をして並ぶのが一番効率的。とりあえず、ネギと鳥もも肉、レタスやトマト、きゅうり。そういえばドレッシング切れてたと思って塩ダレのドレッシングを買い物がこに入れてレジに並ぶ。一番少ないところへ。

「ふう、この人数なら…。」

とりあえず、馬鹿みたいに買い物がこをいっぱいになっている人も居ない。タイムセールが始まりさっさかレジを終え、店を出る。相



変わらずの土砂降りには滅入るけどまたまた走って家まで帰った。

「ただいまさーん。おーい、親父い、夕飯どうすん？」

「いらん。」

まあ、酒のつまみもあるし、親父は勝手にやってくれるだろう。

「しゃーない。作るか。」

くたばってる三笠に健康食品の「Joy・Zoy」を食べさせてから、二階のキッチンに駆け上がる。そういえば、もう八時近い。妹の奈帆ももういい加減に引きこもり図書室から帰ってくるだろう。そんな事を思いながら手っ取り早くネギと鳥も肉を塩コショウで炒める。この手抜き料理は、スーパールの惣菜から発案された究極の早飯。レタス、トマト、きゅうりも適当にぶった切って皿に盛って…。こうして、ものの五分でみるみるうちに出来上がった夕飯をテーブルに置く。

「おーい、出来たぞ。」

「いいにおい。上がっていいの？」

「どうしてもって言うならだ。」

「じゃっ、遠慮なくっ。」

二階に駆け上がるその軽やかな足取り。つい数分前に恐ろしい声を吐き、くたばっていた人間とは到底思えない。思えるわけない。

「わー、あなたって料理もできるの？」

とても手抜き料理だとは言えないこの喜び様…。若干引きつった感じで目をきよるさよらせてたら、丁度妹が帰ってきた。

「ただいま。ん、この良い匂いは…!!」

そう、いい匂いを放出している手抜き料理に引き寄せられて、手を洗い、二階に駆け上がった瞬間…。

「あ、あんちゃん!!!! ガッールフレン…ド…いたん?!

きやー!!!!」

なんと言っ早合点な妹なんだ…。コイツ理解が早いのは良いが、早合点の頻度と質の悪さに関してはピカ一だ。

「あのなあ…。」

その声も虚しく、妹は階段を駆け下りて（爆走の類だと思って  
いただきたい）親父に拳骨を食らっていた。

「へえ…妹さんいるんだ…。」

「そーゆーお前はどんなんだよ。」

「想像に任せるわ。」

あー、こう言うこと言うやつに限って居ないんだっただけ。まあ、  
腹が減って仕方ないのでまずは食べてしまおう…って三笠のヤツ何  
時までこの家に居座るつもりだ？長々居座られる事の無いようにも  
なおさらダラダラさせてられない。奈帆もやって来たことだし。

「おい、もう食うぞ。」

《いただきます。》

あ、ハモツた。そのときの顔もなかなか見物だと思った。

食事が終わって皿を洗い終わると、三笠が聞いてきた。大概みんな  
良くも悪くも必ず聞いてくる。

「お母さんは？仕事？」

「奈帆を産んですぐに死んだの。確かあれは事故だった…はず…。  
あれっ、十四年も前だとよく覚えていないもんだからなあ…。」は  
つきり言って覚えてない訳が無い。あんな死に方されちゃあ…。

「そうなんだ、ってことは家事とかは岸本がやり続けてるの？」

「そうだな。少なくとも奈帆にだけは惨めな思いはして欲しく  
ないからな。あのかわいそうって言う視線とかは特に嫌なもんだか  
ら。」

あえて明るくそう言う。でなければとくに鬱の始まり始まりだ。  
この類の話をしない事でもそうなる確率を大幅に減らしてる。十四  
年なんていうのはなかなかあつという間でもあると思うし、家事つ  
てなかなか考え事を邪魔してくれるから、考え込まずにやってこれ  
るというのもある。

「強いよね…。あたしはね六歳の時に両親が離婚して、どちらも  
引き取る気ナシだったの。まあ、愛されない子供って言うやつかし

ら？だから保護施設に入れられていたけどそれも去年で終わり。今一人暮らしで何とかやってるみたいな感じだし、中学生よりも前からのめりこむ物は本とアニメ、漫画だけ。中二病みたいな中二病つてやつで逃げてきた感じもあるかも。」

なかなかこいつも重い家庭事情があったようだ。長い黒髪と調度品のように調った顔からは想像できない。人間やつぱり見た目じゃ分らない物だ。なかなか面白いかも。すると三笠がおもむろに…。

「面白い話が聞けたわ。そろそろ帰るから。」

「送らなくて良いのか？」

「大丈夫よ、あたしの家はなかなか明るい通りにあるんだし、もし同学年の人に見つかったら変な騒ぎは確定物よ？」

「まあそうだが。年頃の少女を夜に一人で帰らせるというのは俺の信条に反する気がしてならない。」

「どんな信条よ。全く聞かせていただきたいわ。」

「そうか、なら二時間でも三時間でも話してやろうか。」

「さすがに遠慮しといてあげるけど、どうしてもって言うなら。」

「。」

「断る！」

「冗談を本物と思われては困る。家の玄関までそんな話をしたと思うと、壁一枚先の奈帆が盗聴してるのではという恐怖感に襲われた。だからなんだという話だけだ。」

「それじゃ。コーヒーはツケでね。」

お前にツケという概念なんか有ったのかと問いたい衝動を抑えてかろうじてため息で抑えた。

「じゃあな、ほんと、次は客としてきてくれ。」

「さあね、あたしの気分によるわ。」

「よってもよらなくてもうちは客以外としては認識しないからな。」

「。」

「なーんだ。残念だわ。きっと女には優しいと思ってたのに。」

「思い込みはよしてくれ。」

「分かった事にしておくわ。じゃ、また明日。」

「会わない事を願う。」

「ひどいこと言うのね。」

「早く帰れ。」

こうして長い長い、そして面白い一日が終わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9922x/>

---

中二病女と腑抜けな男

2011年11月24日18時59分発行